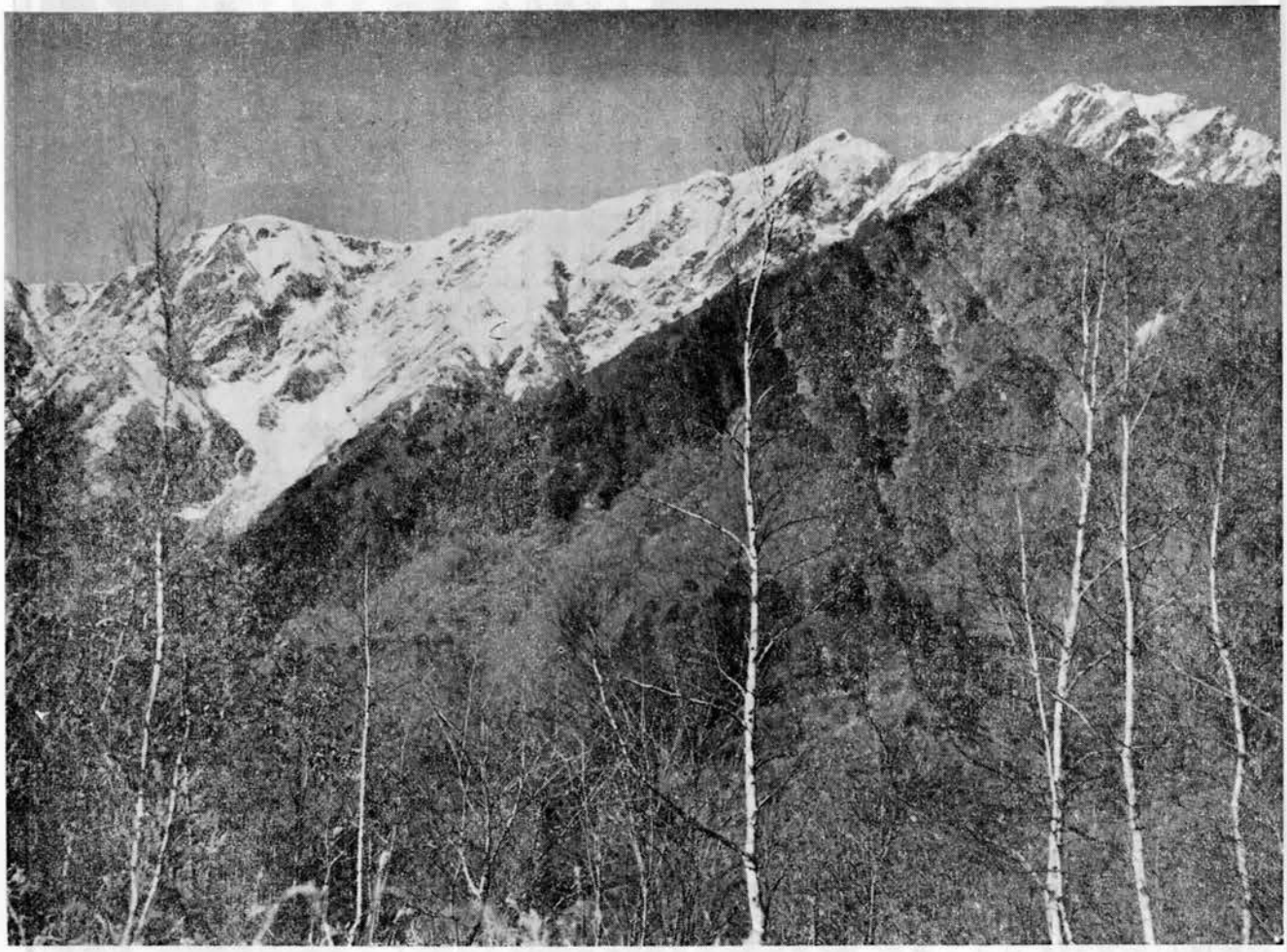
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第13巻　第12号　1968年12月25日　大町山岳博物館



スキーヤーに望む

今年は暖冬異変で十二月に入っても北ア山麓で雪がない。

暖房器具・防寒衣料なども例年より、売行がのびないそうである。

先日スキー場を持つ町や村では「雪ごい」の行事が行なわれた。

スキー人口は年々のび、このところ各地に「民宿」ブームを巻き起しているが、雪が降らないことにはどうしようもない。

しかし予報では二十日過ぎには降り年末年始は相当積るだろうとのこと。

雪と共にスキーヤーが年末年始の休暇を利用してドットばかりに押しよせてくるだろうことはたしか。

普段、車のゴミゴミするほこりっぽい街の中で仕事に追い廻されていた人々には、広々とした白いゲレンデを滑走することは、誠に爽快この上なしであろう。限られた休暇を充分楽しんでいただきたい。

解放感を味わうのは良いけれども、近年のスキーヤーの中には他人のスキーやスキー靴を失敬する輩が現われはじめたのはいただけない。道徳的な低下が目立つのも近年のスキーヤーの特徴のひとつ。

昼食や間食の紙クズ・空カン・ビニール袋など雪に穴を掘ってポイと埋めてしまう。

表面上は雪で覆われてしまうので大変きれいだが、雪が消えはじめると大変である。ところきらわず埋められたゲレンデは一変してゴミの山に変る。

近年環境美化運動が盛り上りを見せ、保健所なども力を注いで、登山者などにはゴミ籠などを各地に設置して協力を呼びかけている

スキーヤーも紙クズ・空罐などは宿に持ち帰るか施設備えつけのクズ籠に入れるよう心がけてほしい。

【千葉彬司】

北アルプス北部の山今昔（五）

……後立山連峯を中心として……

長沢　武

(2) 山名考

A 統一山名の生れるまで

〔五万分の一の地図誕生とその功罪〕

(イ)陸測測量班と五万分の一地形図

長い間混沌模糊としていた、北アルプス奥山の山名、それは深山のため人間との接触度の低かったという原因に加えて、当時は山の位置づけをする測量、製図技術共に全く幼稚なもので「絵図」といわれる通り、奥行きのない鳥観図的域を脱することのできない地図でした。

富山側では加賀百万石前田利常候のキモ入りで慶安元年（一六四八年）より始められた「黒部奥山廻り役」も、それから五二年過ぎた元禄十三年になっても、国境稜線の山々については、まだ概念がよくつかめていないようです。

〔奥山廻り岩城記録〕

（前略）右書上申御境山に方角並道程に付有峯村より信州境道のり、立山峯よりはりの木峠迄道のり、蛭谷村より信州境鍵ヶ嶽迄道のりの義、右山々難三罷越一山数多く御座候に付方角道のり等難レ図由達申候（後略）

これは藩より絵図製作に当って、奥山のようすを詳しく答えるようにとの奥山廻役への命令に対しての彼等の卒直な告白の手記です

しかし、江戸時代も後期となると、伊能忠孝などにより西洋式測量術に基づく緯度経度の入った地図が作られるようになり、さらにあらゆる面で急速に近代化が進んだ明治の御代においては、行政上、軍事上正確な国土地図製作の必要にせまられて、明治十七年から内務省地理局と陸軍省参謀本部とで測量が開始されたわけで、北アルプスでは前穂高岳、白馬岳が共にその最初で、明治二六年に一等三角点の撰点をみており、鹿島槍、槍ヶ岳では三五年に行なわれております。

ところで、明治二十年代といえば、日本の近代登山の黎明期で、かのウエストン氏が来日したのは、陸測部発足の明治二一年で氏は二四年には御嶽、駒ヶ岳登山と槍ヶ岳の試登をし、翌二五年には、槍ヶ岳の頂上に立っております。志賀重昂の「日本風景論」の刊行は白馬、穂高岳に三角点の撰点された翌明治二七年で、この年にはウエストンは第一回の白馬登山をしており、続いて二九年（「日本アルプス登山と探険」が刊行された年）には第二回目の白馬登山をしております。

しかし、後立山縦走の兆がみえるのは明治四〇年代になってからで、この頃においてもなお山名の混沌としていたことは、例を唐松岳から爺岳に挙げて五月号で紹介した通りです。

さて、北アルプス最初の五万分の一地形図は大正二年「白馬」「黒部」「立山」が発行されたわけですが、これは白馬岳に三角点が設けられてから実に二十年の歳月を経ております。もっとも陸測部では、明治二三年「高山」という二十万分の一地形図を発行、同三十四年修正を行なっており、農商務省地質調査所でも「富山図幅」という二十万分の一地形図を出していますが（注5）白馬岳の名前は載っているものゝ実測まがいの幼稚なものでその他の山名や位置についてはほとんどあてにならないくらいのものでした。

(ロ)、誤読、音読、宛字

五万の地図を見る時、測量班は少なからざる努力をしてこの測量と地形図の編集に当ったことに深い敬意を表しますが、その山名が当時の信州名であったり、富山名であったりは良いとしても（これは案内者が信州人であるか越中人であるかにより、またその山へ入り安い条件をもつ側の呼称が使用された場合が多い）聞き違え、宛字であることが過去の資料からはっきりしている場合もあり、これは今日山岳研究家によってしばしば取り上げられる問題で、今考えてみると陸測部も山名の決定には、も少しの注意と慎重さがほしかったと思われます。

…聞き違えか書き違えと思われるもの…

古絵図など古い資料からして、五万の地図の山名が北アルプス北部のものにおいても二三聞き違えたか書き違えたと思われるものがあります。白馬岳以北の山では、朝日岳と恵振、或は雪倉岳と鉢ヶ岳が五万の地図と元禄以降明治に至るまでの絵図を比べる時いずれも山名が入れ替っておりますし、南の鹿島槍の隣の布引岳についても、古くからの言伝えや雪形からして、現在の布引岳の位置は間違っているのではないかと思われます。

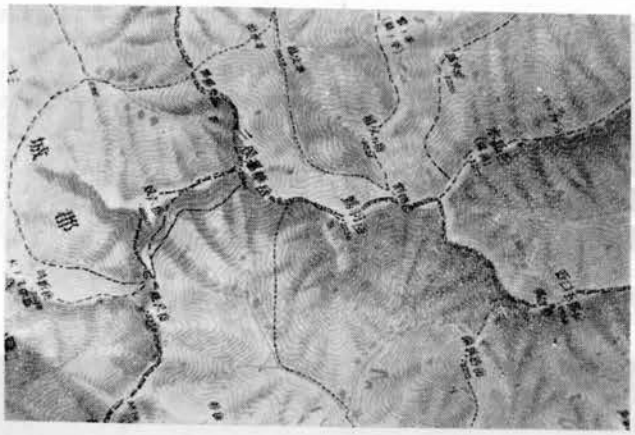
これらについては八月号に述べた通りです。

これらの誤りは初期の段階において訂正されるべきもので、五万分の一地図発行以来既に六十年近く経てい、この間一般には誤りを誤りと知らず正しきものとして世人に使用されているので、今さらこれを訂正すれば大混乱が起る心配があるので、何とも致し方ありません。五万分の一「槍ヶ岳」図幅の初版と思われる大正元年測図、同四年製版出版の地図では、現三俣蓮華岳が鷲羽岳に又双六岳が蓮華岳となっているのに対して一登山家から次のような抗議文が出されました。（注6）

（山岳第八年二号「机上談山」）

『（前略）槍ヶ岳図幅を見ると飛信越国の境が鷲羽嶽となっている。実際は其の東北二九二四㍍の三角櫓のある峯が鷲羽嶽とか単に鷲とか呼ばれている峯で目標になるべき鷲羽の池も図にちゃんと表はれているのである。而して三国の境は蓮華嶽なる名で呼ばれているのである。而して其の南地図に蓮華嶽とあるのは正に雙六岳に当っているのである。これらの山の名は殆んど一般の通用を持っているので、決して彼我相混じて使われる様な事のないものであるから頗る該図の名は不都合千万であってその地方に行く人々にとっては人足の使う名と行違いが出来たりして仲々迷惑を起すことであろうと思う。』

この抗議文は採用されて、昭和五年修正測



昭和32年北安曇教育会発行地図（部分図）（劍物岳の名前が載っている）

図より三国境の山は三俣蓮華と改められ、鷲羽岳は東北の二九二四㍍の峯へ移されたわけで、これについては後で述べるよう問題は残りましたが、当時においても陸測部は山名についてはそうとう神経を使っていたし、訂正もやぶさかではなかったようです。

誤読、音読、宛字

次に問題となるのは、誤読、音読、宛字の問題で、誤読→宛字、音読→宛字、宛字→音読、宛字→誤読などとなって、語源や語根が長い間に忘れられ、異なった意味に解釈される結果が生まれるもので、注意したい点です山名に限らず種々雑多な全国の地名をみてもこれが原因で今日多くの地名が生まれ、その語源、語根を尋ね調べる地名学という学問も生まれている程で、幾つかの古絵図の山名を見ても宛字が良く使われていますが、五万分の一地図でもさらに宛字を用いたと思われるものが二～三見受けられます。

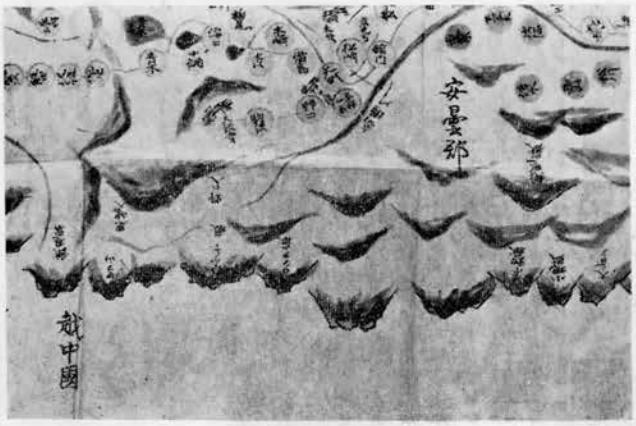
現在よくその例として取り上げられるシロウマ岳の白馬の他、後立山→五竜山、オテンショ岳→大天井、ゴーロ岳→五郎岳、祖父岳→爺岳、薬師又は釈師→杓子岳などがありますが、詳しくは山名考各論にゆずりたいと思います。

(ハ)、広域総称の分化

原始時代人が、目に見える幾千幾万の星をさして、ただ単にお星様と呼んでいたものが時代が進むに従い、それ〴〵の星に名前がつけられ、星座別に区分されるようになったように、奥山の姿も「岳」から個々の峯々に名前が附けられるようになるのですが、しかしその中間の時期では一群の山々、峯々を総称したとえば白馬岳山群を蓮華（花）山、鷲羽三俣蓮華群を鷲ノ羽ケ嶽、爺、針ノ木及び槍から餓鬼の山脈を屏飛、蓮華から不動岳にかけての針ノ木、あるいは立山の後の山として五竜ー爺岳と思われる間を後立山と呼んだ時期があります。これらは白蓮花の花弁群、鷲が羽根を広げた姿、あるいは屏風を立てたように打続く山々、地獄の針ノ山のような無数のピーク群といった、どれもそのものの姿に似ていい、言い得て誠に妙を得ているふさわしい山名だと感心します。

ところでこの山名は、現在古い資料が揃っていないので、何時頃から呼ばれて来たのか良く解らないけれども、いずれも一六〇〇年代には既に呼ばれていたようで、これらの山が分峯名を持つのは文化・文政（一八〇三ー）以後のことです。

越中側の絵図では、元禄（一六八八ー）から天明（一七八一ー）の間のものではいずれも鑓ケ岳から鷲羽ケ岳までの間に、不帰、餓鬼、後立山、真砂子、針ノ木、鷲羽の七ツの山名を見るに過ぎませんが、文化の初め奥山廻り役が作ったと思われる「奥山御境目並谷口川筋等畧絵図」では、大蓮花、栂山、コスバリ、中岳剣などの山名が現れて参りますし白馬岳周辺では大蓮華、中蓮華、前蓮華などの名前が天保十三年（一八三五）の絵図に見られます（第一図参照）また、南、北針ノ木岳、大蓮華、小蓮華山の名前も文政五年（一八二二）の絵図から見えてきます。（注7）しかし、明治中ー末年頃迄未分化であったのは針ノ木周辺の屏風と現表銀座と呼ばれる槍ー燕の屏風と呼ばれる山々で、これらの峯々に名前が与えられ文字となって世に出たのは、やはり五万分の一地図においてではないかと思います。



信濃国絵図(部分図A)(元禄の絵図と思われるものである。)日本民俗資料総覧

(ニ)分峯名の統合

前項のように、片や一連の山々が無名のまゝ明治末年まで来たかと思うと、一方、猟師鉱山師など人々と接触の多い山においては、岳という程のものでないピークや露岩に迄何々山という名前がつけられるものもあり、これらの整理統合ということも五万分の一地図発行に際しては必要となったと思われます。

鹿島槍は三つのピークを持って、北峯を槍ケ岳、中央を乗鞍岳、南峯を布引岳と言ったし、爺岳も三つの峯を持っていい、北峯を五岳中央を六岳、南峯を祖父岳、或い北峯を鹿島大岳、中央を西俣岳、南峯を祖父岳などと呼んでいましたが(注8)五万分の一地図では共に整理統合され、代表名をもって山名と決ったものです。

この他、五竜岳、野口五郎岳もこのような統合名をとったと思われる山で、野口五郎岳については明治の始め頃から四五六岳と呼んでいたことは確で、この山の北に三ツ岳があり、南に七八沢岳(現在無名峯)がある処からみると、この五郎岳もあるいは北峯を四岳中央を五岳、南峯を六岳と江戸時代には呼んでいたのではないかと思われます。

(ホ)地域異称の整理と統合

地域による呼称の相違については、第二表あるいは八月号にくわしく述べた通り、五万分の一地図製作に当って、どの山名を採用するかは大きな問題であり、大いに迷ったことでしょう。殊に三俣蓮華周辺は、信州、飛騨越中の三国境の地点で、山名も三者三様であり、最后迄結論が出なかった所で、三俣蓮華双六岳については前(ロ)項で紹介したような山岳家の抗議文などもあった地点です。

北アルプス北部の後立山周辺の山について結果から見れば、その大部分は信州名を採用したわけですが、三俣蓮華など一部の山名については、しっかりした根拠もない山名を付したとして、「黒部奥山廻り役」という古くから充実した組織をもって国境警備に当り、絵図や山名もしっかりしている越中側の名称をどうして採用しなかったという越中側山岳研究家の批判もあるようです(注9)

尚、岳として山名を附するに足らない山として、陸測班から整理の対象となった山に、現鷲羽岳と野口五郎間の稜線上の山に、越中名中岳、信州名七八沢岳、またこの山の南で鷲羽岳の近くに、越中名獅子岳又は小鷲岳、信州名割物岳がありますが、これらは共に地元の人達に古からしたしまれて来た山ですので、なんとか五万分の一地図上に日の目をみせてあげたい山です。

信濃国絵図(部分図B)

(注5) 武田久吉「白馬岳初期登山者その他」山岳会報二五五(一九六六年九月)辻本満丸「祖父岳の二日」山岳第四年第三号(明治四十二年)
(注6) 中島正文「黒部奥山廻り役(一)」山岳第三二年第一号P五五
(注7) 中島正文「黒部奥山廻り役(三)」山岳第三四年・一号
(注8) 北安曇教育会編「北安曇郡地誌」明治三九年四月及び下川瀬人氏談
(注9) 中島正文「黒部奥山廻り役(一)」山岳第三二年第一号P五六

上高地の冬

坂田　尚

十月下旬紅葉の終りを飾るカラマツの黄葉が散る頃から上高地の冬がせわしく訪れてくる。十一月十日の最終バスの運行を最後に山の観光業者は施設を閉じそのほとんどの人が下山してしまい、雪にとざされた上高地は静かな自然の姿にかえる、これから来春の四月までが山の一番美しい季節でもあろう。

広々と分布した植物は降雪に背丈をちゞめ又深い雪に埋れる、一見山は長い冬眠期に入った如くみえるのであるが此の厳しい自然界の中にも、少数の人間を始め数多くの動植物たちの生き抜く斗いが続けられているのである。

十二月上旬頃からの降雪は根雪となりその後は吹雪の明け暮れが続くこの附近の例年の積雪量は一㍍前後である。

冬山になって人足のとだえた、この地にも十二月下旬から一月上旬までに冬山登山の大学山岳部員や一般山岳会の社会人パーティーの若者達が沢渡部落からワカンの輪型を雪の上に残しながら冬山重装備の重いキスリングを背負って入山する、途中幾個所かのデブリとナダレの危険をおかしながら彼等は登山計画にもとづいてたゞ黙々とその目的を慎重に遂行するのである。

巨大な生き物のような荒肌を横たえた焼岳も今は雪のベールに包まれ静かな呼吸をしている。鉛色に半ば凍結した大正池に越冬するマガモの群が登山者の列に怯え水面にいくつかの波紋を残して飛び立つ、白銀の目映ゆいばかりの穂高連峰が見られる晴天も一ヶ月に四、五日あるだけである。

雪又雪、五十センチ巾のトレースのついた果しない道が針葉樹林帯の中に続いている。帝国ホテル手前の夏道から雪道は左に折れて木村小屋へ通じる冬期登山者の誰もが必ず立寄って入山届けを提出しなければならない木村小屋には現在上高地の主である木村殖氏が薪ストーブの前にどっかりと腰をすえてヒゲだらけの顔で素朴ではあるが温味のある応待をしてくれる、早速に渋茶と小かぶの漬物を出してもてなしてくれる青木の小母さんは数少ない上高地の越冬人の中で唯一人の女性である。

夏山最盛期には数百台のマイカーとバスで混雑していた駐車場附近も今はひっそりとした雪の広場である、梓川右岸の安曇村営ホテルのあたりから越冬人の飼うカン高い犬の啼き声が聞える、冬の河童橋は寒風に雪が吹き飛ばされ橋の上にはザラメ雪が凍り付きどこからともなくミシ〳〵と橋の軋む音がする。梓川の水は一本の帯になって減水し、カワガラスが一羽こまめに水に潜り潜っては上がり身ぶるいしていた、川底に水苔のついた小石の一つ〳〵がくっきり浮び上がって見えるのもこの季節である、此の附近で静かな眠りに入っているのは閉ざされた観光施設だけであろうか。

小梨平にある厚生省の管理事務所の煙突から出ているストーブの白い煙りが道ゆく登山者の重い足を軽くはげましてくれることも、うれしいことである。

キャンプ地に群生しているミヤマズミの小枝から数羽のシジュウカラが梢の雪を散らして飛び立った。一㍍近くも背丈のあるクマザサも雪に埋れ山の傾斜面からこの雪原へかけ雪の上に残された無数のウサギの足あとは彼等の前夜の行動を物語っているものである。

登山者は重い足は増々窪みを深く残して六百沢の針葉樹林を行く、時々モミやツガの枝が雪の重味をふるい落すように身ぶるいをする。テンの残した二点の足あとが執念深くトレースのあとを追っている、たまに雪道を横切るキツネの足あとはさすがに注意深く、あたりを警戒しているさまがテンとくらべて面白い象対である。

六百沢を過ぎ小白沢まで来ると急に視界が開けてケショウヤナギの群落が目に入る、一月から三月にかけて梢の先の若芽が赤く萠え続け雪の白さと梢の赤色のバランスは明神岳を背景にして実に見事な景観である。

梓川の流れは明神橋を境いに水枯れしており、此のあたりで地下水が湧き明神池の清流と六百沢で出合い冬の大正池を満しているのである。冬の登山者が氷を割ってイワナのつかみ取りを楽しむのも明神橋附近の水溜りである。

大正池より焼岳

明神池附近にキツネ、テン、タヌキ、ヤマイタチなどが獲物を求めて集まるのもこうした水溜りにイワナがいるためでもある。ケショウヤナギの若芽にウソが群がりその根方にこぼれた新芽をあさるキジバトとヤマドリが見られる　アカゲラが老木の幹を叩き、ミヤマハンノキの枯木に穴をうがつ。

池中に群生していた水草イチョウバイカモも夏の頃より大部少なくなっているのは池に越冬する数十羽のマガモの冬の食餌に啄ばまれているためである。

最低気温マイナス二十五、六度を記録する寒地にあっても生物がそれ〴〵の生活を大切に守っているのには驚かされる。

上高地で冬の自然に還った景観の中で特に美しく印象に残るもの一つに梓川べりの霧氷がある。降雪と湿度と気温の変化が樹木を一夜のうちに美の極致へ変えてしまう、その美しさは陽ののぼる一瞬までのごく短い生命でありほんのわずかな自然の変化が一瞬の美を与え、またそれを惜しげもなく崩壊してゆく。

雪に埋れた冬の上高地のすべてがこの季節の間だけでも自然ので姿あるのは誠に嬉しい限りである。

【明科フイッシングランド飼育係】

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)　(郵便番号三九八)

表紙説明

新雪の鹿島槍

撮影　山本携挙

山と博物館　第13巻第12号
一九六八年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL大町②〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円　(送料共)